
FINAL FANTASY零式～10を名に持つ《男？》～

ピタゴラスロット

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FINAL FANTASY 零式 10 を名に持つ《男？》

【Nコード】

N1492Y

【作者名】

ピタゴラスロット

【あらすじ】

Dr.アレシアを母と慕う特別な候補生達が所属する幻のクラス《0組》。表舞台に出ることの無かった彼らは、朱雀の危機をきっかけに朱雀の精鋭として動いていく事になる。

そして《0組》の中には本来存在しないはずの10ではない《10》を名に持つ候補生がいた。

プロローグ（前書き）

完結目指して頑張ります。

話の流れから歌詞を入れざるを無かったんですが良いのかな？

ちょっと不安です。

プロローグ

彼は忘れぬ者

彼は与えし者

彼は異なる者

「そう。起きるのね」

迷子の足音消えた。

「私としては、あまり貴方に起きて欲しくないのだけれど。」

代わりに祈りの唄を。

「あら、ごめんなさい。気に触ったかしら？」

そこで炎になるのだろう。

「開演にはまだ早いわ。もう少しおやすみなさい。」

続く者の灯火に。

「貴方に会えるのを楽しみにしてるわ、ディケム。」

彼は紡ぎし者

彼は欺きし者

彼は死すべき者

第1話（前書き）

作者はFF零式を完全クリアしてはいない為おかしな所が出てくる
かもしれません。

あくまで数ある零式の中の1つとお考えください。

第1話

西暦 842年 水の月12日

【ペリシティウム白虎】を有する【ミリテス皇国】は、隣国である【朱雀領ルブルム】への侵攻を開始する。

宣戦布告と同時に国境付近へ集結していた皇国軍はルブルム各地に進軍を開始。

同時刻、別動隊による【ペリシティウム朱雀】への奇襲を敢行。その部隊にはルシが含まれていた。

ルシを用いた国土侵略行為。これは、オリエンス四ヶ国が定めた【パクスコーデックス】に対する重大な規約違反であった。

【魔導アーマー】を主戦力とする皇国軍に対し、ペリシティウム朱雀は、魔法を以てこれに応戦。

その魔法によって呼び出される【召還獣】の圧倒的な力は、戦艦をも凌駕し、皇国軍の奇襲は失敗するかに見えた。

しかし、白虎ルシであるクンミ率いる特殊部隊が朱雀の攻撃をかくぐり、新兵器【クリスタルジャマー】を発動。

【朱雀クリスタル】の完全な無効化に成功する。

魔力の源を絶たれた朱雀軍は、戦力の大半を失いなすすべもなく制圧されていった。

皇国元帥【シド・オールスタイン】は朱雀174代院長【カリヤ・

シバル6世】に対し、朱雀全軍の武装解除および朱雀クリスタルの引き渡しを要求。

朱雀に与えられた猶予は6時間。要求がのまれない場合、皇国軍の殲滅作戦による朱雀への粛清が行われる。

魔導院陥落の危機対し、カリヤ院長が下した決断は幻といわれた朱雀候補生【0組】クラスゼロを主とした魔導院解放作戦であった。

朱雀領に存在する魔法院から少し離れた所の住宅街。本来ならば住民達の賑やかな声が聞こえるその場は、皇国軍の攻撃により今や建物の燃える音しか聞くことができないうちに壊滅状態にあった。

街道の真ん中に出来た“山”に腰掛ける形でそれはいた。

長身で肩幅の広い人の形をしたそれは、一分の隙間もなく漆黒の甲冑に覆われていた。

無駄な装飾は一切ないが、ただその無骨な甲冑は真紅のマントを羽織っており、その紅が一層に闇色を際立たせていた。

『ディケム、聞こえるか?』

甲冑の耳が聞き慣れた声を捉える。しかし、周りに人影は無い。恐らくは甲冑のどこかに通信機が仕込まれているのだろう。

「感度良好よ、セブンちゃん」

初めて甲冑が口を開く。

といつても、顔貌は闇色の兜に覆われている為確認は出来ないが。

『間もなく作戦開始時間に入る。お前の役目覚えているな?』

やや高めの男声を発した甲冑は腰掛けていた山から跳び降りると妖しくクネクネと身体を揺らす。とてつもなくシユールだ。

よく見ると“山”は皇国軍の亡骸で造られていた。甲冑はその山に手を向けると山を構成していた亡骸が少し浮き上がる。

「別個で動いているあんた達がスムーズに魔導院にたどり着けるようにアタシは白虎の殿方達の目を釘づけにする。要は陽動ねん」

向けていた掌を強く握れば、遺体から様々な色の光がディケムと呼ばれた甲冑へと吸い込まれていく。

ディケムは軽く伸びをしながら自らが受け持つ役割を口にする。

『すまないな、本来ならお前1人に任す内容じゃないんだが』

通信機越しに聞こえたセブンの不安げな声にディケムは声を上げて笑った。

「あのねえ、アタシを誰だと思ってるの?殿方の10人や20人相手にできなくて」

「見つけたぞ、情報通り1人だ!」

「気をつける!最後の通信によると奴はジャマーの中魔法を使用し

てくる！」

ディケムの言葉を遮って、男達の怒声にも似た叫び声がこの場に響いた。

声の方を見れば大量の皇国軍の姿。その数は10人20人どころでは無い。どうやら、先に相手をした部隊の応援要請を朱雀侵攻に向けていた複数の大小隊が受け取ってしまったらしい。

「あー、セブンちゃん。やっぱり応援よこしてくれない？」

『ディケム……頑張ってくれ』

その発言の後にセブンは通信を切ったらしく、ディケムは1人皇国軍に向き直る。

「この数相手すんのは流石に骨が折れそうだね」

首を回しながらディケムは自分を取り囲んだ皇国軍に対して小さくぼやいた。

「早めに終わらせてやらないとな……」

ディケムとの通信を終えたセブンは自分の得物である鞭剣を召還する。

銀髪の美しい彼女には、上品さと野性的な暴力を併せ持つ得物はとも似合った。

「んー？通信終わったのー？」

ジャックがセブンの通信が終わったのを見計らい、いつも浮かべている笑顔で声をかけてくる。

いつも子供っぽい笑顔を浮かべている彼だが、セブンは彼が“笑っている”のを数えるほどしか見たことがない。

「ああ、早めに終わらせてやらないとディケムが危ないかもしれない
い」

通信機越しに聞こえた皇国軍の足音は幾ら何度も数が多すぎた。

ディケムの身を安じているわけではなく、最悪ディケムが倒された場合作戦に支障が出てくる。

別にディケムに対して、冷たいわけではない。自分達はマザーの駒、自分達の命より作戦成功を優先するだけ。それは、セブンだけでなくディケムやジャックを含めた0組全員が思っている事だ。

「ディケムなら心配いらなくて。僕達の中で一番強いんだから
さあ」

お気楽な調子でジャックが言う。確かに、ディケムは強い。三種の攻撃魔法を最初に使えるようになったのは彼だし、総合的な身体能力が一番高かったのも彼だ。

自分達とは違う、まさに戦う為に生まれてきた存在だと思う。ジャックの言うとおり自分が心配する必要はないのかもしれない。

「作戦開始時刻だ。いくぞ」

丁度作戦開始時刻になった事もあり、余計な事を考えていた自分の雑念を振り払いつつセブンは作戦を開始した。

「あらあら、ちょっと時間がかつちゃったわね。みんなは大丈夫かしら？」

結局、ディケムが一息つけたのは、皇国軍が撤退した6時間後だった。撤退という事は0組を含む、朱雀軍が魔導院解放に成功した事になる。

ディケムの後ろには無造作に積まれた皇国兵の亡骸や大破した魔導アーマーによって作られた山が幾つもの出来ていた。

「汗もかいちゃったし、早くシャワー浴びたいわー」

ゆっくりと伸びをしつつ、ディケムは皇国兵の遺体の山に掌を向け一気に握る。するとまたも様々な色をした光がディケムの中へと取り込まれていく。

この光は、あらゆる生き物の魂と言われる【ファントマ】といわれるものであり、ディケムや0組等限られた存在にしか出来ない芸当だ。

「ファントマ回収も終わったし、集合地点に向かおうかしらねえ」
腰に手を当てて、足をくねらせながら歩く所謂モデル歩きでディケムはその場をさる。

目指すは、魔導院だ。

第2話（前書き）

アクセスが2000を超えました。
こんなに見てくださる方がいると思うと嬉しくて笑みが止まりませ
ん。

ユニークアクセスも500を超え、嬉しい限りです。今後ともよろ
しく願います。

次話あたりでキャラ設定を挟みたいと思います。

第2話

作戦終了の後に指定されていたポイントに向かっていったディケムだったが

その途中にとある通信が入ってきた。

「はいはい、此方ディケムよ。なにか問題かしら？」

いつも通り陽気に通信に出たディケムだったが、通信の相手は思わぬ人物だった。

『私よ。作戦は無事に終了したようね、お疲れ様』

「あら、マザーじゃない！珍しいわね、アタシに連絡寄越すなんて驚く事にディケムに通信をしてきたのは育ての親であるマザーことDr・アレシアだった。

アレシアが我が子同然に可愛がる0組のメンバーに通信をする事は珍しくない。“個人的な頼み事”や行動の指示など様々な連絡がくる。

しかし、ディケムに連絡がくる事は滅多に無く。アレシアからの連絡は連絡を受けた他の仲間に伝えられるのが殆どだった。

『残念だけどこの連絡はみんなにしてるの。貴方が特別ってわけじゃないわ』

「あら、そーなの……」

『もうみんなには伝えてあるんだけど集合地点の変更よ。場所は魔導院、そして集合時間は水の月14日の正午よ』

「あら、随分と時間があくじゃない。面倒事？」

『軍令部長よ。貴方達の活躍をあまり良く思っていないみたいでね、なにかといちゃもんつけてくるのよ』

「無能な同僚がいるなんて大変ねえ。今度マツサージでもしてあげるわ」

『ふふっ、ありがとう。あ、そうそう言い忘れる所だった。貴方達の宿舎が魔導院に移る事になったから荷物を纏めときなさい』

「了解よ。じゃあ、お仕事頑張ってちょうだい」

マザーとの通信を終えるとディケムは踵を返し元来た道を引き返す。

「あら、今日の食事当番って私じゃない!？」

ふと思い出したかの様に声を上げるディケム。

作戦を終えてお腹を空かせて帰ってくるであろう兄弟の為にディケムは走り出した。

今の0組の宿舎は魔法局の近くにある小屋だ。

2、3人で使うには十分な広さだが総勢13名となると少々狭い。

特に食事時となるとその凝縮された混沌が勢いを増す。

「お〜い〜しい〜ねえ〜」

「ああ、作戦の後だから尚更だな」

普通に食事を楽しむ者。

「そもそも食事というのは生きるという事に必要不可欠な」

「だあーっ！！だから、なんでアタシに言ってくんだよ！！」

食事をしながらお喋りを楽しむ者。

「ンだ、テメエ。喧嘩うってんのか、コラァ」

「どうしてもって言うなら相手になるぞ」

食事中に喧嘩を始めるもの。

「なにになに〜？喧嘩あ？僕も混ぜっっちゃおつかなあ？」

「やれやれー」。

はやし立てるもの。

「皆さん止めてください」

「せっかくの食事が台無しですよ」

喧嘩を止めようとするもの。

「ディケム、すまないがおかわりをくれないか？」

「はいはい、キングちゃんもどう？」

「貰おう」

喧騒の中落ち着いて食事続ける者。

「あんた達ー、おかわりいるかしら？」

そして喧騒はいつもの一言で集結する。

「「おかわりっ！！」」

先程まで騒いでいた面々が全員一斉に器をディケムへと差し出す。

その光景が可笑しくて、幸せすぎてディケムは笑みを漏らした。

「皆がおかわりするなら、追加で作らないとね」

「手伝おう」

「私も」

「俺も」

「んじゃー僕も」

「ならち、皆で手伝わない？」

「さっせい」

願わくば、「」の幸せがずっと続きますように……。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1492y/>

FINAL FANTASY零式～10を名に持つ《男？》～

2011年11月7日12時03分発行